全国の園長先生に無料でお届けしています

2019 秋 Autumn

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF 版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

段差を連続性に！ ともに育てる保幼小接続

インタビュー　千葉大学 教授 **松嵜洋子**

座談会　**園と小学校が保幼小接続を語り合う**
千葉大学 教授 **砂上史子** /
アストロキャンプ稲毛東保育園 / 宮野木保育所 / 認定こども園ひまわり幼稚園 / 千葉市立松ケ丘小学校（千葉県）

Q&A　神戸大学大学院 准教授 **北野幸子**

データ　**保幼小接続の「いま」を考える**

ベネッセ教育総合研究所　https://berd.benesse.jp/

これからの幼児教育 秋 2019 Autumn

CONTENTS

1
特集
段差を連続性に！
ともに育てる保幼小接続

14
データから見る幼児教育
保幼小接続の
「いま」を考える
――第3回幼児教育・保育についての基本調査――
國學院大學 人間開発学部 子ども支援学科 教授
塩谷 香先生

本誌をお手にとっていただき、ありがとうございます。

今号の特集テーマは「保幼小接続」です。園と小学校との連携・接続に際しては、枠組みの違いによる壁を感じて難しい面もあるかと思います。保幼小接続にはどのようなポイントがあり、取り組みの実態はどうなっているのかなど、壁を乗り越えるヒントを紹介します。

特集の取材を通じ、園の先生方が日々実践されている幼児教育は、すべての教育の根幹となるとても重要なものであることを、改めて確認することができました。

今回の特集企画にあたり、さまざまな自治体・幼稚園・保育所（園）・認定こども園・小学校の皆様にヒアリング等を通じてご協力いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

最後になりますが、2019年9月の自然災害により被害を受けられた皆様に、謹んでお見舞い申し上げます。

『これからの幼児教育』編集部

※本誌の取材は2019年8月に行いました。

「これからの幼児教育」2019年秋号
編集発行人／岡田晴奈　発行所／(株)ベネッセコーポレーション
印刷製本／凸版印刷（株）
編集協力／(有)ペンダコ、丹羽三千代　執筆協力／二宮良太
撮影協力／ヤマグチイッキ、荒川潤　イラスト協力／アサヌマリカ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。

※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2019

特集

段差を連続
ともに

インタビュー P.2
子どもの伸びしろを広げるため
積極的なカリキュラム整備と
人的な連携・交流を
千葉大学 教育学部
教授
松嵜洋子（まつざき）先生

性に！
育てる保幼小接続

「要領・指針」※1 に小学校以降とのつながりを踏まえ、幼児期に育みたい資質・能力が示されるなど、
保幼小接続への関心が高まりつつあります。
発達の個人差が大きなこの幼児期を、小学校の学びにどのようにつないでいくとよいのか、
園と小学校がともに子どもを育てていく教育のあり方について、
さまざまな面から考えていきます。

※1　本誌では、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を「要領・指針」と表記します。
※2　「保幼小接続」には、幼保連携型認定こども園での接続も含みます。

座談会　P. 6

保幼小接続を進める先生方が語り合う
「つながる」先の可能性と課題

千葉大学 教育学部 教授
砂上史子先生

千葉市・私立 アストロキャンプ稲毛東保育園 園長
大場美佐子先生

千葉市・公立 宮野木保育所 総括主任保育士
大町礼子先生

千葉市・私立 認定こども園ひまわり幼稚園 主幹教諭
竹内久美先生

千葉市立松ケ丘小学校 教務主任
篠田浩太郎先生

Q&A〈子どもの発達過程から見る保幼小接続〉　P. 10

接続期の子どもの発達を理解し、主体的に学びに向かう姿勢や態度を育てる

神戸大学大学院
人間発達環境学研究科
准教授
北野幸子（さちこ）先生

子どもの伸びしろを広げるため積極的なカリキュラム整備と人的な連携・交流を

千葉大学 教育学部 教授 松嵜洋子（まつざき）先生

まつざき・ようこ 臨床発達心理士。主な研究テーマは、保幼小接続、乳幼児期の運動発達と環境。国立教育政策研究所プロジェクト研究「幼小の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究」委員などを務める。近著に『よくわかる！教育・保育ハンドブック―幼保連携型認定こども園教育・保育要領に学ぶ 保育の質を上げる10のポイント』（フレーベル館・共著）、『幼児理解の理論と方法（乳幼児教育・保育シリーズ）』（光生館・共著）など。

園と小学校が育ちのビジョンを共有し、接続期を成長の機会に

「10の姿」を共通言語として保幼小の意思疎通を深めていく

保幼小接続の必要性を問われたら、ほとんどの保育者が必要と答えるでしょう。私が10年前に接続の研究を始めた頃は、「わざわざ何かをする必要があるのか？」と聞き返されることが多かったことを考えると隔世の感があります。

では、既に十分な取り組みが見られるかというと話は別です。保幼小接続には発展の過程の目安を示すステップがあり（図1）、さすがに「ステップ0」の園はあまり見られなくなりましたが、「ステップ3」「ステップ4」まで進んでいる園も多いわけではありません。子ども同士の交流から始めたものの、「あまり効果を感じない」「どう深めればよいかわからない」といった感想を抱く園も多いのではないでしょうか。

保幼小接続の大切さは、今回の要領・指針の改訂（改定）にもよく表れています。改訂の大きなポイントは、幼児教育において育みたい資質・能力として、「知識・技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が示されたことです。これら3つの資質・能力は小学校以降も育成されていきますから、幼児教育が学校教育の基礎として明確に位置づけられたといえるでしょう。小学校学習指導要領の総則にも、幼児教育をしっかりと踏まえて小学校教育につなげることの大切さが強調されています（図2）。

図1 連携から接続へと発展する過程のおおまかな目安（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議報告書より）

ステップ 0	連携の予定・計画がまだ無い。
ステップ 1	連携・接続に着手したいが、まだ検討中である。
ステップ 2	年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない。
ステップ 3	授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。
ステップ 4	接続を見通して編成・実施された教育課程について、実施結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている。

図2 小学校学習指導要領の保幼小接続に関する記述

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

（平成 29 年告示 小学校学習指導要領「第1章 総則 第2 教育課程の編成 4.学校段階等間の接続」より。太字は編集部による）

一方で、これまでは幼児教育と小学校教育の関係者の間で十分な意思疎通が図れていない状況がありました。園では5領域をもとに保育を実践してきましたが、それを通した育ちが小学校にどのようにつながるかが見えにくかったのです。そこで今回の改訂では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）という観点が導入されました。「10の姿」により、子ども一人ひとりの育ちを整理して捉え、いわば共通言語としてわかりやすく伝えることで、小学校に引き継ぎやすくすることをめざしているのです（図3）。

「10の姿」は、「育てるべき」ではなく「育ってほしい」と表現されているように、到達目標ではなく、あくまでも育ちの方向性を示したものです。5歳児の段階では、興味・関心等による個人差に開きがあるからです。

例えば、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」では、「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる」と書かれています。ここでいう「興味や関心、感覚」とは、子どもによっては「数字や文字がある」と気づくことでもよいですし、「読めるようになりたい」「使えるようになりたい」と感じる姿として表れるかもしれません。大事なのは、その時点での学びをもとに、子どもが次の成長への扉を開けられるようにしていくことです。保育者は、子どもの学びを無理に一定レベルまで引き上げようとする必要はなく、「10の姿」を方向性として捉え、小学校での成長にどうつながっていくかをイメージしながら、子どもが次の学びへと向かえるような援助をしていってほしいと思います。

接続期のカリキュラム整備で保幼小接続の基盤を整える

5歳児クラスでは、「小学校で困らないように」といった援助が見られることがあります。しかし、幼児教育は「準備教育」ではありませんから、小学校の学習や生活への適応に過度に配慮することなく、時期ごとにふさわしい生活や活動を意識することが大切です。

幼児期の数か月は、大きく成長できる期間であるにもかかわらず、小学校の準備や卒園式の練習などに終始してしまうのはもったいない気がします。保育者主導ではなく、あくまでも子ども主体で、小学校進学に

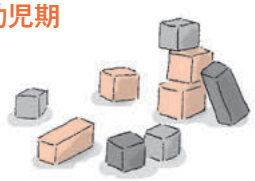
図3 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（「10の姿」）

1 健康な心と体
2 自立心
3 協同性
4 道徳性・規範意識の芽生え
5 社会生活との関わり
6 思考力の芽生え
7 自然との関わり・生命尊重
8 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
9 言葉による伝え合い
10 豊かな感性と表現

幼児期の育ちや学びは小学校ではどのように伸びていくか

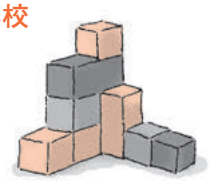
例えば、「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の場合は……

幼児期



生活や遊びを通して数量などへの「興味や関心、感覚」が芽生える

小学校



興味や関心、感覚を出発点として、概念の理解を深め、しだいに活用できるようになる

向けてやりたいことを考え、カリキュラムや環境構成を検討しましょう。

これからは、園側が「アプローチカリキュラム」、小学校側が「スタートカリキュラム」を準備し、システムとして接続の基盤を整備することが求められます。「どうして改めてカリキュラムを作るのか」と、必要性を疑問視する方がいるかもしれません。ここには、前述の通り幼児期に育みたい資質・能力が要領・指針に位置づけられたため、カリキュラムとして明確化する意図があります。

さらに、その背景として、園・小学校の双方で、職員の世代交代が進み、経験の浅い職員が増えているという状況があります。これまでは５歳児や小学１年生といった接続期のクラスは、ベテラン職員が担任をすることでうまく対応しているケースが多く見られ、「こんな場合は、こう対応するとよい」といった、いわば暗黙知が蓄積されていました。しかし、そのような対応はだれにでもできるわけではないため、暗黙知をカリキュラムとして明確化し、どの職員でも一定の保育や教育ができるようにしようというわけです。

ただし、園の状況は、規模やその年の子どもの構成、興味・関心等によってもさまざまに変化します。その中で、園として普遍的に大切にしたいことを見いだして、アプローチカリキュラムに落とし込むとよいと思います。自治体によってはスタンダードのカリキュラムを作成しているところもあるので、それをうまく活用していきましょう。

連携ではねらい・目標の共有を交流は負担なく継続的に

実際にカリキュラムを推進する際には、保育者と小学校教員の連携が不可欠です。

両者の連携でもっとも大切なのは、互いの保育や教育のねらい、目標を理解し合うことです。例えば、小学校教員が交流活動に参加した際に、園児がお店屋さんごっこをする姿を見るだけでは、「単に遊んでいるだけ」と捉えられかねません。逆もまたしかりで、小学校の授業の目標を理解せずに見学すれば、幼児期の援助との違いに違和感を抱くこともあるでしょう。交流活動などの前に、短時間でもよいので互いのねらいや目標を伝えられると、活動の意図や子どもの姿をより深く読み取ることにつながります。

さらに、既に実践されている子ども同士の交流も、引き続き大切にしてほしいと思います。これまでは年に１回、園児が小学校に「お客さん」として招かれるなど、イベント的な意味合いが強く、準備の負担が大きいケースがよく見られましたが、もっと日常的な交流が増えるとよいでしょう。２回、３回と足を運ぶうちに園児の緊張はほぐれ、「ここを見てみたい」「こんなことをしたい」といった気持ちが出てくるものです。例えば、園児が小学校に「園だより」を持っていくという活動も考えられます。小学校の先生に丁寧な言葉を使って園だよりを直接手渡し、先生から「よく来たね。ありがとう」などと言われれば、それだけで達成感を伴う重要な経験になります。また、子ども同士が直接かかわらなくても、園児が校内を歩き、校庭の広さに驚いたり、授業をのぞいたりするだけでも入学後の自分をイメージすることができます。

園からは複数の小学校に進学するため、１つの小学校と交流しても意味がないといった意見を聞くこともあります。しかし、園児にとっては小学校や小学生に触れ、自身の成長の見通しをもつことが大切であるため、実際に進学する小学校であるかどうかはあまり関係ありません。

要録で「伝えたい」「知りたい」ことのミスマッチは少しの工夫でなくせる

保幼小接続の大切なポイントの１つとして、指導要録・保育要録（以下、要録）を通して子どもの育ちをいかに伝えるかについてもお話しします。

一般的に保育者のみなさんは、「この子のことを理解してほしい」といった熱意のあまり、要録に内容を詰め込み過ぎる傾向があるようにも見受けられます。しかし、１人で数十人を担任する小学校教員にはそのすべてを受け止める余裕がなく、結果的に十分に活用されないケースもあるようです。しかし、保育者と小学校教員のどちらも、子どもの健やかな成長を一番に考えていますから、本来的に「伝えたいこと」と「知

りたいこと」に大きな違いはありません。保育者の側が伝える内容や伝え方を少し工夫するだけで、活用されないミスマッチを防げる場合があります。

小学校教員へのアンケートでは、要録を読むタイミングは３回ほどあることがわかりました。１回目は要録が送られてきたとき、２回目はクラスが決まったとき、そして、３回目はゴールデンウィークの前後です。注目したいのは３回目で、入学から１か月ほど経ち、気になる姿が見られた子どもについて、園での様子を確認したり、指導に生かせる情報を探したりするために、要録を読み返すのです。

要録には子どもの長所や得意なことだけではなく、小学校に申し送りしておいた方がよいと思われる点も記すと思いますが、ネガティブな内容に終始せずに園での援助方法などを書き加えると、まさに小学校教員には「知りたいこと」となります。例えば、「友だちとの話し合いに積極的に入れない」で終わらせることなく、「１対１で話をする状況をつくると言葉が出てくる」といった具体的な手立てを加えると、小学校での指導に生かしやすくなります。そして、要録は、小学校の先生と情報交換するためのツールと考えましょう。すべてを盛り込まなくても、それを媒介にしてやり取りできるような内容を書くように心がけると、互いにとって意味のある要録になるはずです。

５歳児後半の接続期に意識したい３つの援助のあり方

最後に、接続期に特に意識したい３つの援助をお伝えします（図4）。

１つめは、子どもの言語化を助けることです。保育では「読み取り」という言葉が使われるのに対し、小学校では「見取り」が一般的です。１人で大きなクラス集団に接する小学校教員は、個々の子どもの内面の読み取りよりも、言葉や文章などで表出されたことの見取りが多くなります。そのため、５歳児になったら、保育者は子どもの思いを先回りして言葉にせず、子ども自身や子ども同士による言語化を支えましょう。

図4 円滑な接続に向けて意識したい3つの援助

1. 子どもの**言語化**を助ける
2. **共感的**な**かかわり**を大切にする
3. **環境構成**と**教材**を見直す

２つめは、共感的なかかわりです。１つめの考え方に通じますが、子どもが困っている場面でも、すぐに介入せず自力解決できるよう支えることで、小学校以降も自分で問題に向き合おうとする力につながります。子どもが試行錯誤しているときに、保育者が「頑張る姿を見ているよ、知っているよ」と、共感する姿勢を見せることで、子どもは安心しますし、自己肯定感も高まります。そして、それが次の意欲へとつながっていきます。

３つめは、環境構成と教材を改めて見直すことです。５歳児ともなると園環境をよく理解し、できる遊びを熟知しています。だからといって子どもに任せきりにせず、どのような環境や教材を用意するといっそう夢中になれるかを、検討してください。その体験は、小学校で課題に集中する力につながるでしょう。

小学校では学習や活動は時間で区切られ、どれだけ熱中していても、終わりの時間を迎えたらやめなくてはなりません。そんな「タイムリミット」に支配された生活は大人になっても続きます。一方で幼児期は、好きなことに好きなだけ熱中できる「ワークリミット」を中心に過ごせる貴重な時期です。興味のあることにのめり込む経験は、子どもにとって宝物になるに違いありません。それを支える接続期の援助が、子どもの伸びしろをますます広げていけると考えています。

保幼小接続を進める先生方が語り合う

「つながる」先の可能性と課題

千葉市では2017年度より行政と公・民の保育現場、教育現場、学識経験者が連携して、幼児期の学びや育ちを小学校へとつなげる取り組みを進めています。2018年度に接続を意識した連携・交流を行った園の保育者と小学校の先生が、コーディネーターの砂上史子先生とともに保幼小接続について語り合いました。

小学校との交流の意義

小学校のイメージをもつことで安心感や期待感を高める

砂上（コーディネーター）　2018年度、千葉市の保幼小接続の取り組みのモデル実施園として、アプローチカリキュラムの作成や近隣小学校との交流に取り組まれた3園の先生、そして、モデル実施園との連携・交流活動をされた公立小学校の先生に、それぞれのご経験をお話しいただきます。まずは各園に、近隣小学校との交流について教えていただきましょう。

大場（私立保育園）　小学校との連携には以前から関心をもっていましたが、小学校側の担当の先生がわからず、高い垣根を感じていました。今回、千葉市からお話をいただき、近隣の複数の小規模園と一緒に小学校との交流を初めて行いました。内容は、校庭遊びを1回、校内見学を1回です。

大町（公立保育所）　7月に保育者が小学1年生の生活科の授業を見学し、小学校入学までにどんな力をつければよいか、そのために保育所でどんな経験を積み重ねておくとよいか、1年生の担任や教務主任の先生とお話をしました。その後、秋から子どもたちが小学校の校庭訪問、おたより交換、校舎内探検などを行いました。

竹内（私立認定こども園）　保育者が連携先の小学校の先生と意見交換を行った後、子どもたちが校庭訪問や交流会を体験しました。体育倉庫にある道具で遊んだり、補助具を使って逆上がりに挑戦したりしました。そのとき対応してくださったのが、今日この座談会に出席されている篠田先生です。先生が子どもたちの質問に丁寧に答えてくださったおかげで、子どもたちも小学校の先生に積極的にかかわろうとしていました。

千葉大学 教育学部 教授
砂上史子先生

すながみ・ふみこ　臨床心理士・臨床発達心理士。専門は保育学。文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会幼児教育部会委員、厚生労働省社会保障審議会保育専門委員会委員、内閣府幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂に関する検討会委員を務め、平成29年告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂・改定にかかわる。著書・共著書に『子ども理解と援助』（ミネルヴァ書房）など。

篠田（小学校）　園児たちは、校庭の鉄棒で楽しそうに遊び、さらに「この部屋は何？」と体育倉庫に興味をもったので、中に案内して「好きなもので遊んでいいよ」と伝えました。小学校での生活をイメージしてもらうのはよいことですし、園児の楽しそうな様子を見ることができて、私もうれしかったです。

竹内　交流会の後、お世話になった1年生にお礼をしたいと子どもたちから声が上がったので、メッセージを書いて、小学校に渡しに行きました。小学校側の負担にならないよう、先生に渡したらすぐに帰る予定でしたが、篠田先生のご配慮で本園を卒業した1年生が出迎えてくれて、子どもたちから直接お礼を伝えることができました。帰る道すがら、子どもたちは「1年生が出てきてくれるとは思わなかった！」と大喜びで、小学校への親しみを深めている様子が印象的でした。

大場　初めて小学校を訪問したときは、校庭の広さや遊具の大きさに驚いて、最初はドキドキした様子でしたが、元気に走り回り、遊具で遊ぶうちにドキドキが

※文中では、幼稚園・保育所・幼保連携型認定こども園の表記をすべて「園」で統一しています。
※文章中敬称略。

アストロキャンプ稲毛東保育園
（私立）／園長
大場美佐子先生

認定こども園ひまわり幼稚園
（私立）／主幹教諭
竹内久美先生

宮野木保育所（公立）／
総括主任保育士
大町礼子先生

千葉市立松ケ丘小学校
教務主任
篠田浩太郎先生

千葉市・私立 認定こども園ひまわり幼稚園
園長　腰越早苗先生
所在地　千葉県千葉市中央区松ケ丘町 611
園児数　117人（3～5歳）

千葉市・私立 アストロキャンプ稲毛東保育園
園長　大場美佐子先生
所在地　千葉県千葉市稲毛区稲毛東 4 丁目 2-21
園児数　48人（0～5歳）

千葉市・公立 宮野木保育所
園長　堀江由佳先生
所在地　千葉県千葉市稲毛区園生町238-56
園児数　150人（0～5歳）

ワクワクに変わり、小学校ならではの環境に興味をもったようでした。例年だと、就学時健康診断の後、少し不安な様子を見せる子どももいるのですが、昨年度はそれはありませんでした。小学校で遊んだ経験が不安を軽減するきっかけの１つとなったのでしょう。

篠田　園児にとって、小学校訪問や小学生との交流はとても意味があるもので、いろいろな機会を利用して、もっと気軽にかかわれるようにすることが大切なのだと実感しました。ただ、今回の交流では、本校以外の小学校に入学する園児が多くいたので、「本当は自分が入学する小学校と交流できればよいのだろうけれど」とも思いました。

竹内　本園は今年度、5 歳児が 37 人に対して就学先が 16 校と多岐にわたり、松ケ丘小学校に入学予定の子どもは少数です。それでも、小学校の環境や授業の様子を具体的に目の当たりにできたことで、小学校に対して安心感や明るい見通しをもつことができています。その意味では、交流先が入学先でなくても十分に意味はあると感じています。

篠田　園の先生にうかがいたいことがあります。園との交流に対する小学校側の意識は近年、確かに高まっていますし、子ども同士の交流の機会も増えています。園児にとってその場限りではない、よりよい交流にするために、園はどのような活動を望んでいますか？

竹内　園児と小学生との間に自然な会話が生まれるような時間があればいいですね。なかなか打ち解けられない子どもも、例えば園にはない小学校ならではの場所を小学生に案内してもらうと、小学生と話ができて、小学校生活へのイメージも深まりそうです。

大町　本園が交流した小学校では、子どもたちが小学生のお兄さん、お姉さんに質問する時間をつくってもらいました。園であらかじめ聞いてみたいことを話し合ったことで、意欲的に質問し、やり取りする姿が見られました。

砂上　小学生への質問項目を考えて交流に臨むことで、活動のめあてが明確になりますし、小学生との相互作用も生まれます。小学生から園児に質問したり、園での活動を披露したりするなど、いろいろな交流の形が考えられますから、そうした活動の事例を園や小学校で共有し、積み重ねていくことも重要ですね。

園と小学校とのギャップ

小学校で重視される「我慢する力」をどう捉え、育むか

砂上　では、実際に交流を図る中で、園の先生や子どもたちが感じた小学校との段差や、双方の意識の違いなどはありましたか。

大町　小学校の先生からは、入学してくる子どもの課題として、時間に対する意識が十分に育っていない、自分の困りごとを周囲に伝えることができない、身の回りの整理整頓がうまくできないといったケースがあることをうかがいました。園は分刻みの時間割りで生活するような場ではありませんが、自分なりに状況を判断して、活動を切り替えていく力など、小学校で必要となる力を見通した上で、園での援助を考えていくことが大切だと改めて感じました。

竹内　小学校の先生方と意見交換を行った際に、「やるべきことをしっかりやれる子、先生の話をきちんと聴ける子を送り出してもらえるとよい」という話をうかがいました。小学校の先生方の思いを聞き、私たちも「小学校に行って困らない子どもに育てたい」という思いが強くなりました。そして、保育者の中から「文字の学習や玉そろばんなど、小学校入学の準備になるような時間を増やしてはどうか」という声も上がりました。しかし、保育者がさらに話し合い、「子どもの発達の特性を踏まえて、園でこの時期にしかできないことを体験することが大切だ」という結論になったのです。「45分間じっと座っている子どもを育てるのではなく、自分で考えて、友だちと協力し合いながら積極的に課題を解決しようとする姿勢を育てたい」という言葉を保育者から聞いたときは、円滑な接続の意義を理解できた手応えを感じました。

大場　今やるべきことを行う力、活動を切り替えていく力は、単に時間の意識があるからできるのではなく、そもそもの土台として、１つの活動を十分に楽しみ、満足する経験が必要だと保育者は考えていますよね。子どもたちは「満足」を経験しているからこそ、先を見通したり他者を思いやったりして「我慢」ができるのですから。十分に遊び込んで満足する経験が、我慢したり、気持ちを切り替えたりする力につながっていることを、私たちは忘れてはいけないと考えています。

篠田　十分に楽しんだ経験があるからこそ、さまざまな局面で我慢ができるようになるというのは、とてもよく理解できますし、そうした力を小学校でも活動を通して育んでいきます。それでも、今どうしても我慢しなければいけないという場面もあります。

砂上　「させられる我慢」が必要な場面も確かにありますが、育みたいのは「自ら我慢する力」です。先生が話しているとき、おしゃべりをすると叱られるから静かにするのではなく、先生の話を聴くと楽しいし、新しいことが学べておもしろいといった満足感や必要感を土台に、子ども自身が納得して我慢できるようになることが大切で、それは園でも小学校でも同じです。ただ、小学校は時間と空間でやるべきことが明確に区別されていることが多いので、「させられる我慢」が色濃く見えるわけです。発達段階を踏まえれば、園で行うべきは小学校の準備教育ではないことは明らかですが、一方で、小学校での生活を見通しながら、援助のあり方を一人ひとりの子どもに合わせて考えていくことも必要です。難しいことではありますが、年長クラスの担任のやりがいともいえるでしょう。

保幼小接続と「10の姿」

子どもの育ちを接続する共通言語「10の姿」への理解を深める

砂上　小学校との接続を意識することで、園での保育にどのような変化が生まれましたか。モデル実施園からは「小学校生活への円滑な移行という面はもちろん、低年齢の子どもの保育のあり方を見直す機会になった」という声も上がっています。

大場　本園では、小学校との交流をきっかけに、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）は５歳児になって突然育つものではなく、低年齢児の段階から意識していくものだという認識を、保育者が強くもつようになりました。そこで、２歳児から５歳児まで月案に「10の姿」の視点を取り入れ、アプローチ期

を５歳児後半に限らず、もっと大きな視点で見ています。園全体で保育者が「10の姿」を意識することで、活動のバランスがよくなっていると感じています。

砂上　「10の姿」は要領・指針に盛り込まれているだけでなく、小学校学習指導要領においても、幼児期の学びを児童期の学びにつないでいくことの重要性が示されています。また、小学校に提出する要録も「10の姿」を踏まえて作成されます。篠田先生、小学校現場では「10の姿」への理解は進んでいますか。

篠田　私自身、園の先生方との交流の中で「10の姿」について理解を深めましたし、要録も、本校では新しいクラス編成前の１年生担任、本年度の１年生担任、校長、教頭、養護教諭、そして、教務主任の私が目を通しています。ただ、「10の姿」を共通言語にして、園の先生方と語り合えるようになるには、私たちはもっと「10の姿」について学ぶ必要があります。

大町　「10の姿」に対する小学校の先生の理解は、もっと深まってほしいと私も思います。その手立てとしてどんなことができるか、園も小学校も一緒に考えていきたいですね。

砂上　「10の姿」を保幼小の間でどう生かすかは今後の課題です。小学校との交流の際、幼児だけでなく小学生についても、具体的な活動の姿とこれからの育ちの見通しを、「10の姿」と関連づけながら小学校教員と保育者とでざっくばらんに語り合うことで共通理解も進むのではないでしょうか。

篠田　「10の姿」に対する小学校側の理解を深める方法としては、例えば研修の際に、スタートカリキュラムと一緒に「10の姿」を教員間で共有することも考えられます。

竹内　園の活動が小学校での学びにどのようにつながっていくのか、「10の姿」を踏まえて保護者にも積極的に伝えていきたいです。本園では、モデル実施園としての取り組みについて、園のウェブサイトや園だより、小学校の写真を掲示した紹介コーナーなどで保護者に周知しているので、それらを活用していきたいです。

砂上　小学校生活で「10の姿」はどのように発揮され、どのように育っていくのか、小学校の先生や保護者とともに、理解を深めていきたいですね。

コラム　「10の姿」は０歳児からつながっている

千葉市こども未来局こども未来部幼保支援課　上田昌弘課長補佐

千葉市では、幼児教育と小学校教育の接続強化を図るため、「千葉市版アプローチカリキュラム」の普及に取り組んでいます。民間保育園、公立保育所、私立幼稚園から指定されたモデル実施園が、千葉大学の先生方のアドバイスを受けながら、５歳児後半の指導計画の見直しと実践を行い、取り組み内容を他園に公開するものです。アプローチカリキュラムの作成に取り組まれたモデル実施園のみなさんは、「10の姿」は５歳児後半からではなく０歳児からつながっていることに気づかれました。このように子どもの発達を大きな時間の流れで捉える視点は、今後、小学校におけるスタートカリキュラムにも必要かもしれません。小学校教育を担当する教育委員会、幼児教育を担当するこども未来局がともに、「小学校に慣れる」という短期的なねらいを超えた、中長期的な連携も考えていきたいです。さらに、年度初めに各園や小学校の連携担当者を周知するなど、最初の垣根を取り払うサポートも、工夫していきたいと思います。

「千葉市版アプローチカリキュラム」作成のポイント

https://www.city.chiba.jp/kodomomirai/kodomomirai/shien/chiba-city_ac_sakusei-tebiki01.html

千葉市　アプローチカリキュラム　で　検索

接続期の子どもの発達を理解し、主体的に学びに向かう姿勢や態度を育てる

神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 准教授 北野幸子（さちこ）先生

きたの・さちこ 広島国際大学、福岡教育大学を経て現職。専門分野は乳幼児教育学、保育学、保育領域の専門性。環太平洋乳幼児教育学会（PECERA）理事、日本保育学会理事、日本乳幼児教育学会理事などを歴任。主な共著書に『3・4・5歳児　子どもの姿ベースの指導計画』（フレーベル館・共著）、『育てたい子どもの姿とこれからの保育』（ぎょうせい・共著）、『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』（東洋館出版社・共著）など。

◎保幼小接続期の子どもの発達とそれを支える保育への疑問に、Q＆A形式で解説します。

Q 年長児から小学1年生の接続期の子どもには、どのような発達が見られるのでしょうか。

A セルフコントロールの力が高まり、概念理解も進みます。

園では子どもの興味・関心に応じて遊びや活動を支援する個別援助を大切にしますが、小学校では教科書による一斉指導が行われ、チャイムにより時間が区切られています。こうした教育内容・方法の違いは、子どもの発達の特性に応じたものです。

幼児期の特徴の１つが自己中心性の高さです。例えば、幼児期には自分にとって必然性や興味があることならば、没頭して遊んだり、集中して話を聴いたりすることができますが、そうでない場合はなかなかじっとしていられません。それが５歳頃から他者の気持ちを察し、セルフコントロール（自分の気持ちや行動を制御すること）をして関係性の中で学んでいく力が芽生え、１年生の頃から周囲とともに集団で行動したり学んだりできるようになっていきます。こうした成長があるため、小学校では個別支援中心ではなく、一斉指導中心の教育が可能となるのです。

この時期には概念理解や記憶の力もぐんぐん高まります。幼児期は直接的・具体的な体験を通して学ぶ場合が多いのですが、しだいに言葉を通して抽象的な概念から学べることが増えていきます。例えば、海外に行って海外のことを学ぶには、多大な時間と労力を費やさねばなりませんが、小学校中学年くらいになってくると、抽象概念理解の力が高まり、写真や映像、活字から、海外に行かずとも多くのことを学ぶようになります。

そうした実体験中心から抽象的に物事を考えられるようになるといった子どもの発達には、順序性があります。ただし、その発達的な特徴が見られる時期や期間は、個性や環境などによる個人差が大きいことには注意が必要です。その点への配慮が不足すると、接続の段差が高過ぎてつまずいたり、逆に過度の「子ども扱い」となって自尊心や向上心が低下したりすることになりかねません。教育制度は国全体の大きな枠組みとして意図的につくられたものですから、合わない子どもがいるのは当然です。一人ひとりの子どもに不利益が生じないように配慮するのは大人の責任です。

Q 小学校への接続に向けた援助を行う上で、注意すべきことを教えてください。

A 直前に対策を立てて応じるのではなく、経験の積み重ねが大切です。

以前、小学校の先生を対象として、入学までに園で子どもに身につけさせてほしいことを調査したところ、もっとも多かった回答は「聴く態度」でした。小学校では１人の先生が一斉に大勢の子どもを担当する場合が多くなりますから、静かに話を聴いてもらえることがとても重要なのでしょう。

こうした要望を受け、入学直前の子どもに対して「先生が話している間はおしゃべりをしないで」と指導すればよいかというと、それは少し違うと思います。なぜなら、聴く態度は、自分がじっくり話を聴いてもらってうれしいと感じたり、だれかの話を聴いて楽しいと感じたり、友だちとたくさん言葉を交わし合ったりといった、肯定的な経験の蓄積を通じて徐々に培われるものだからです。そうした経験が不足している子どもに対し、「静かに話を聴きなさい」と叱っても、場所が変わって叱る人がいなくなれば、行儀よく話を聴く姿はなかなか見られないでしょう。

そのほかの力や態度についても同じことがいえます。例えば、主体的な遊びや活動を通して、考えたりわかったりすることの楽しさや喜びを十分に経験した子どもは、小学校の学習課題にも前向きに取り組むに違いありません。そういう子どもは自己肯定感が高く、わからないことをおそれず、どんどんチャレンジして成長していきます。逆に幼児期に「どうしてできないの？」「ほかの子は終わっているよ」などと、叱られたりせかされたりしてきた子どもは、学びとは単に自分の不足を補うだけの、つまらない活動と捉えてしまうかもしれません。

入学直前に慌てて対策を考えるのではなく、幼児期を通して、遊びによる学びを支え、失敗を怖がらずに前向きな気持ちで学びに向かう主体性を育てていきましょう。そこでつくられた正のスパイラルは、子どもの学びの原動力になります。そうした経験を積み重ねて、小学校以降の子どもの学びを支えてください。

Q 学びに向かう主体性を育てる保育で意識すべきことを教えてください。

A 「エマージェント・カリキュラム」の考え方を参考にして、活動を深めましょう。

子どもへの洞察と理解を深め、子どもの興味や疑問、憧れなどの内面の動きを読み取れないと、適切な環境構成や働きかけ、促しなどの援助にはつながりません。保育者は常に子どもの内面を読み取る努力を続けながら、子どもを見る目を磨くことを心がけましょう。また、活動のねらいの設定や環境構成に関しても、「昨年こうしていたから」「この時期にはこうだから」といった考えではなく、目の前にいるリアルな子どもの姿をベースに構想する必要があります。

小学校では、教えるべきコンテンツや順序が明確に決められており、あらかじめ作成されたカリキュラムに沿って学習を進めます。これは、たくさんの知識・技能を効率的に教えるのに適した方法です。

しかし、このやり方は幼児教育にはなじみません。幼児期の子どもは、自分が興味をもたないことには意欲的に取り組めないものです。それにもかかわらず、子どもの反応を無視し、保育者主導のカリキュラムに沿って進めても、遊びや活動は深まりません。

幼児教育には「エマージェント・カリキュラム」という考え方があります。「創発的カリキュラム」と訳されますが、これは子どもの主体性や興味などに応じて臨機応変に、子どもとの相互作用のもと、つくり上げていくカリキュラムのことです。子どもが予想とは異なる反応を見せたときも、保育者はそれを柔軟な態度で受け止め、環境を再構成して働きかけを変えていくことで、遊びや活動を深めていきます。

本来、幼児期の子どもは自己中心性が高く、気持ちに左右されやすく、自由に発想し、新奇性を好みますので、保育者の予想が外れても何ら恥じることはありません。「おお、そうきたか」と、その反応を楽しんでしまいましょう。計画通りに展開しないことが保育の難しさではありますが、まさにその点にこの仕事の醍醐味があるとも感じます。

Q 子どもの発達を支える上で、家庭環境や生活習慣の違いをどう考えるとよいですか。

A 多様な環境に慣れ、豊かな経験をする機会と捉えましょう。

子どもが園で過ごす大きな利点は、多様な環境に触れられることにあります。家庭では食べたことのないものが給食で出てきたり、見慣れない植物を育てたり、自分とは興味がまったく異なる友だちができたりといったことです。そうした経験を通し、子どもの内面には多方面の知性が芽生えていきます。

家庭環境や生活習慣の差は小さくありませんが、そうした園での経験が、要領・指針にうたわれている「豊かな経験」の最低保障になると捉えましょう。その上で、多様で豊かな経験を保障することが一人ひとりの子どもの育ちを支え、小学校での学びにもつながっていくことを、保護者にも伝えていきましょう。

Q 接続期の子どもの保育について、保護者に伝える際のポイントはありますか。

A 遊びの大切さを「10の姿」を通して説明しましょう。

現場の保育者の先生方と話していると、保護者から先取り学習のような活動を求められることも多いという話をよく聞きます。その要因の1つは、遊びを通した育ちのメカニズムが保護者に適切に伝わっておらず、小学校入学が近づくにつれて「ただ遊んでいるだけでは困る」といった焦りが生じ、いたずらに「結果」を求めてしまう風潮があるのだと思います。

何かを学ぶ際、子どもには発達の過程に応じた適切な時期があり、それまでは遊びや活動を通して体験していくことが重要であること、必ずしも先取り学習が効果的とは限らないことはご存じの通りです。例えば、早い時期から無理に鉛筆を持たせると、筆圧が強すぎる持ち方が定着してしまうことがあります。また、スポーツでも、何かの種目に特化して学ぶのに適した時期は10歳以降だともいわれています。それまでは、遊びの中で運動する経験を通じ、体の多様な神経回路をつくり、気持ちと体の動きや感覚を統合していく方が大切なのです。「これをさせないと将来困るから」というのは大人本位の考えであり、あくまでも子どもの興味・関心に基づく「やりたい」「知りたい」といった思いの実現を支える保育を大切にしたいものです。

そうした保育を実践するためには、遊びの大切さについて保護者に理解してもらうことが欠かせません。その際に役立つのが、「10の姿」です。小学校の先生と子どもの育ちを共有するための「共通言語」として、今回新たに要領・指針に導入されましたが、一般的にわかりやすい表現が使われているため、保護者への説明にも活用できます。ドキュメンテーションなどを作成する際、「この活動で見られたこんな姿に『思考力の芽生え』を感じました」などと、「10の姿」をキーワードに用いて子どもの姿を説明しましょう。実際にそうした発信を行った園では、保護者から教育的な意図を理解したコメントが多くなり、「そういう育ちがあったから、家でこんなことをしたがっていたのか」といった声も寄せられるようになったということです。

Q 最後に保育者のみなさんへのメッセージをお願いします。

A 保育の仕事の専門性と価値を、子どもたちのために発信しましょう。

保育者のみなさんは保護者などに子どもの育ちを説明する際、いかに一人ひとりの姿が素敵だったかを懸命に伝える一方で、その裏で自身がどれほど環境構成を工夫し、働きかけ、応援し、見守っているかをあまり詳しく伝えようとしないのではないでしょうか。子どもの育ちのすばらしさに比べると、自分たちの努力はかすんでしまうからかもしれません。しかし、自分たちの仕事の大切さをアピールしない謙虚さは美徳かもしれませんが、そのために過小評価されてきた実態もあり、必ずしも子どものためにもなりません。

ですから、今後は保育の専門性について、きちんと言葉で説明することも必要だと考えます。小学校以降の教育とは異なる、人間形成の基礎となる乳幼児期の保育の専門性とその価値を、子どもたちのために、私も保育者のみなさんと一緒に社会に伝えていきたいと思っています。

データから見る
幼児教育

保幼小接続の「いま」を考える

──第3回幼児教育・保育についての基本調査──

ベネッセ教育総合研究所では、幼児教育・保育について保育現場の実情と課題を調査するため、全国の国公立・私立幼稚園、公営・私営認可保育所、公営・私営幼保連携型認定こども園の園長等を対象に2007年より約5年ごとに調査を実施しています。今回は3回目となる2018年の調査（以下、18年調査）の結果から、小学校との接続・連携について取り上げます。

保育者と教員、家庭の連携を深め自己肯定感を高める学びを

國學院大學 人間開発学部 子ども支援学科 教授
塩谷 香先生

しおや・かおり
専門は保育学、保護者家庭支援。東京都品川区立保育園園長、東京成徳大学子ども学部子ども学科教授を経て現職。主な編著書に『幼稚園・保育所・認定こども園「要録」記入ハンドブック』（ぎょうせい）。

子どもが小学校生活をイメージできる交流を

新しい要領・指針、及び小学校学習指導要領には、これまで以上に幼児教育と小学校教育の円滑な接続の重要性が示されています。

今回の調査では、要領・指針に基づき、多くの園で、小学校との接続を意識した教育課程や全体的な計画の編成の見直しが行われていることがわかりました（P.16 1 2）。また、小学校と交流活動をしている比率は、園種を問わず第1回調査（2007/2008年。以下、07/08年調査）、第2回調査（2012年。以下、12年調査）と比較しても高まっており、交流が活発化しつつあることがうかがえます（P.18 4）。

ただ、保幼小接続には課題が多いこともわかりました（P.19 6）。よく聞かれるのが、特に都市部の小学校で、多くの園から入学者が集まるため、きめ細かい連携が難しいということです。小学校から見れば、公・私立の違い以外にも、小規模な園や認可外の園などのさまざまな園種があり、すべての特性を理解して、個々の園と連携するのが難しい実態があります。できれば園側から、近隣の小学校との連携を積極的に進めてほしいところです。

年長児にとって、未知の場所である小学校は、就学への不安を抱きやすい場所でもあります。子どもたちが実際に授業を見学したり、行事や交流活動に参加したりして、小学校の学習や生活がどのようなものなのかイメージできるようにすることで、不安の多くは解消していくはずです。

ですから、子どもが実際に就学する予定の小学校を見学することが、必ずしも重要だとは考えていません。園もその点にはこだわらず、まずは身近な小学校との交流ができるとよいでしょう。小規模な園であれば、他の小規模な園と連携して、1つの小学校と交流するなどの方法もあります。

また、今回の調査で小学校との接続を積極的に行っていることが明らかになった国公立幼稚園や公営幼保連携型認定こども園が、自治体のサポートなどを得てモデル園となり、どのような保育や活動を行えばスムーズな就学につながるのかを研究し、他の園に周知していけるとよいのではないでしょうか。小学校側の負担も考慮し、園同士の横の連携も強化していきながら、交流活動を考えていくとよいでしょう。

■「第3回幼児教育・保育についての基本調査」の調査概要

調査テーマ：園の環境・体制、教育・保育活動、子育て支援活動などに関する実態、園長の意識
調査対象：園児数30人以上の国公立・私立幼稚園、公営・私営認可保育所、公営・私営幼保連携型認定こども園の園長等＊
＊園長・所長・施設長、副園長（教頭）・副所長・副施設長、主任等
調査方法：郵送法（自記式質問紙を郵送により配布・回収）
調査時期：2018年11～12月（2007/2008年、2012年にも実施）
調査地域：日本国内全域
発 送 数：16,037園　有効回答数：4,565園（有効回答率28.5%）
調査項目：環境や設備／保育者の状況／教育・保育目標／要領・指針への対応／教育・保育活動／子育て支援／保育者研修／保幼小接続／園の運営上の課題／保護者とのコミュニケーションなど。

引用転載時のお願い　本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください。本調査の引用時の名称：ベネッセ教育総合研究所「第3回幼児教育・保育についての基本調査」(2019)

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶https://berd.benesse.jp/ または ベネッセ教育総合研究所 検索

保幼小で積み重ねてきたことを共有し、接続期の子どもの姿を知る努力を

保育者と小学校教員との連携にも課題があります。園の先生は小学生の育ちを、小学校の先生は幼児の育ちを理解する努力が必要だと考えています。

例えば、離乳食を食べ始めた0歳児の介助は、子どもが食事に気持ちを向けて自分から食べようと口を近づけてきたタイミングで、スプーンを口に入れるようにします。それは、ただ単に食べさせている、ということではありません。子どもの意欲がさらに高まるように、子どもの発達に合わせた働きかけが必要なのです。それが子どもの主体性を育むことにつながります。年齢ごとのそうした発達を知らずに接していると、主体性の萌芽を見逃してしまうことにもなりかねません。同様のことが接続期の子どもにもいえます。小学1年生の発達や学びを知らずに、接続期の年長児に、就学に備えて一定時間、椅子に座っていられるようにするなどの表面的な援助をするだけでは、学びの土台を十分に育めているとはいえません。

保育者と小学校教員が連携を強め、互いが積み重ねてきたことを共有し合い、小学1年生と年長児、さらには小学生と幼児全般の理解を深めてほしいと考えています。互いの保育・教育への理解を深めることで、保幼小の共通項も見えてくるはずですし、よりよい連携のしかたが見えてくると思います。

家庭の協力を得ながら自己肯定感を高めてほしい

今後、保幼小接続の質を高めるために、私自身が重要だと感じているのは、子どもの自己肯定感をいかに高めるかということです。自己肯定感を高めるには、子どもが自分の意見をきちんと主張し、やりたいことを表現して、認められたという意識をもてることが必要です。子どもの意欲や主体性がポイントになりますが、そうした主体的な学びをどう引き出していくかにも、園と小学校には、発達段階による違いがあるように思われます。園では遊びの中で個に応じて育むのに対して、小学校では集団の学びの中で育むことが中心になります。そうした互いの違いを把握するために、保幼小の先生方で研究会などを開催している自治体もあります。子どもの自己肯定感につながる主体的な学びについて、小学校の先生方と話し合い、ぜひ模索してほしいと思います。

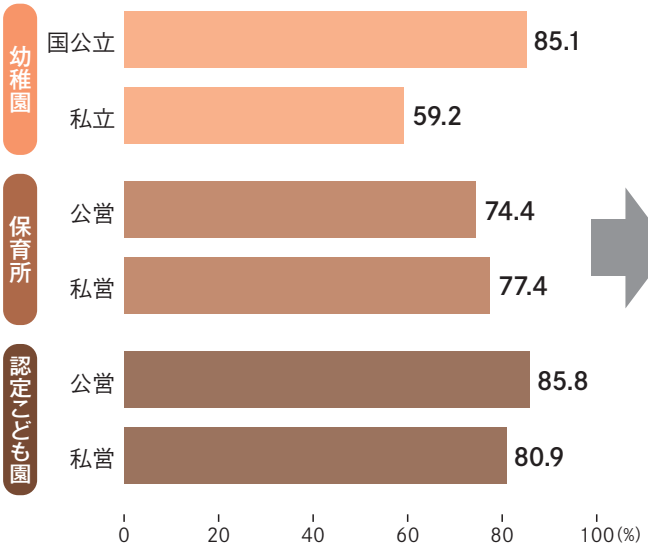
そして、接続期の育ちをさらによいものにしていくためには、家庭の協力を得ることも大切だと考えます。家庭が乳幼児期の生活基盤となる衣食住を保障し、確かな愛着関係を築いて子どもの気持ちを支えることで、子どもは自信をつけ、さまざまなことに挑戦していくことができるからです。それは、小学校以降も同様です。現在、貧困問題や虐待問題など要支援家庭が増えている状況もあるため、園の先生方には、家庭があってこそ幼児教育が成り立つという意識をもっていただき、小学校への接続という観点からも、家庭との連携に力を注いでいただきたいと思います。

そして、小学生を含めた子ども理解をさらに深め、子どもの意欲や主体性を育み、小学校の学びへとつないでほしいと願っています。

次ページから、詳しい調査結果をご紹介します ▶▶▶

1 教育課程・全体的な計画の編成の見直しについて

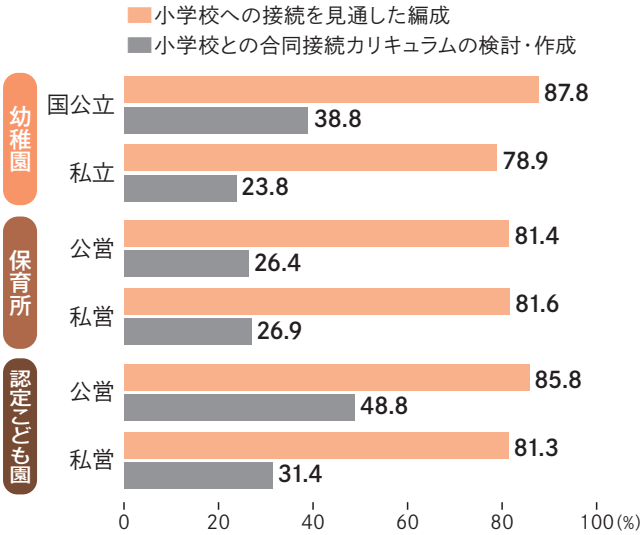
多くの園が新しい要領・指針を踏まえ、積極的に編成の見直しを行う



※「はい」の%。
※以下、1～6について、認定こども園は幼保連携型のみ。

2 小学校への接続を見通した編成や接続カリキュラムの有無

見直しをした園の8割前後が小学校への接続を見通した編成に



※「はい」の%。
※教育課程・全体的な計画の編成の見直しをした園のみの数値。

2018年に、新しい要領・指針が施行されたことを受け、「教育課程・全体的な計画について、編成の見直しを行っているか」を尋ねました（1）。国公立幼稚園と公営・私営ともに幼保連携型認定こども園では、見直しを行う園が8割を超えていました。保育所でも公営・私営ともに7割以上が見直しを行っています。一方、私立幼稚園は、6割弱と他園種よりも低めの結果でした。

また、編成の見直しを行った園に、「小学校への接続を見通した編成をしたか」を尋ねたところ、園種を問わず8割前後の園が、小学校への接続を見通した教育課程・全体的な計画の編成を行っていると回答しました（2）。小学校への接続は、園の種別にかかわりなく、積極的に取り組んでいる様子がうかがえます。ただし、見直しにあたり、実際に「小学校と接続カリキュラムを合同で検討・作成したか」という問いへの肯定率は、2～3割とそれほど高くはありませんでした（2）。その中で、公営幼保連携型認定こども園が最も高い5割近くの肯定率を示し、意欲的に取り組んでいることがわかりました。

塩谷先生から

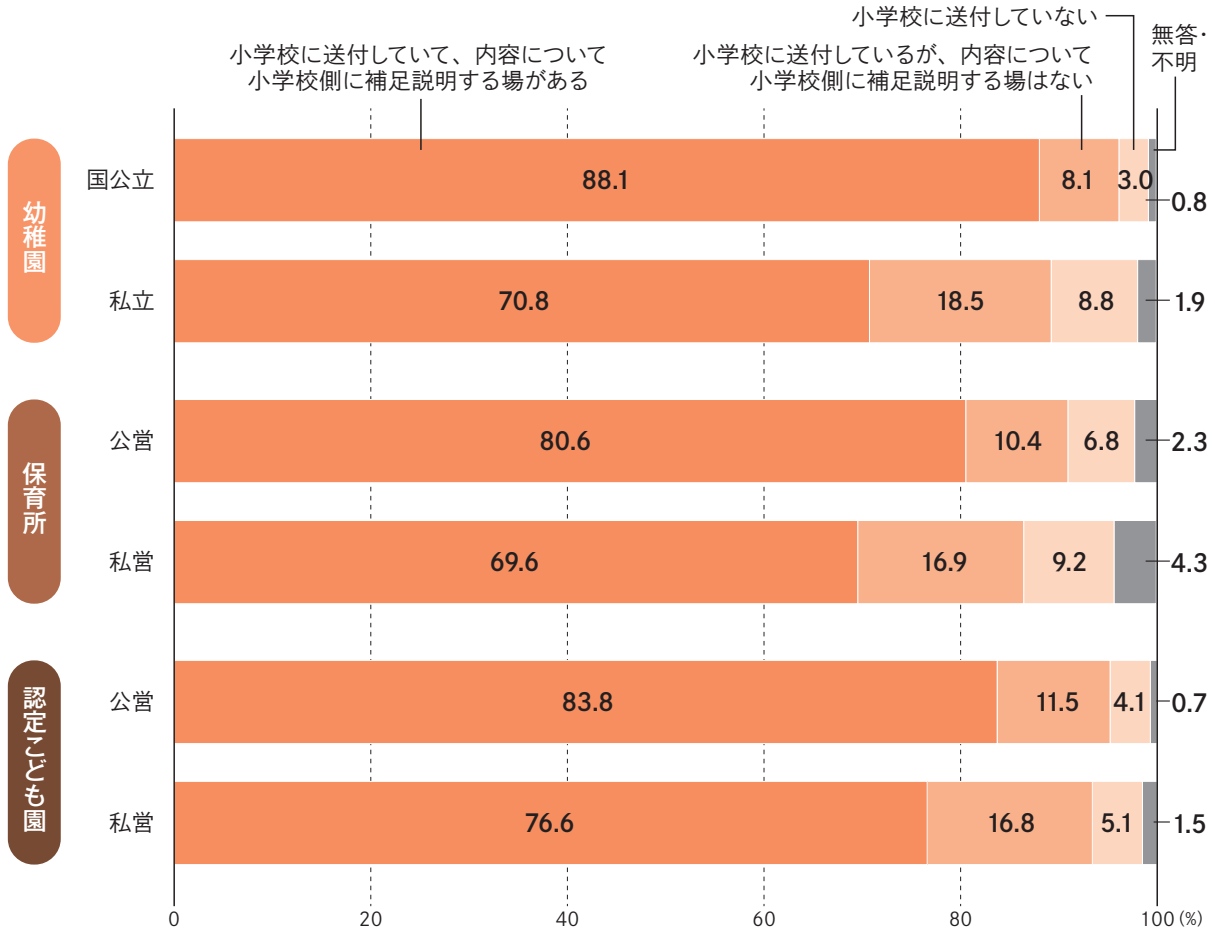
今回の調査は新しい要領・指針に基づき、各園で教育課程・全体的な計画の編成の見直しに積極的に取り組まれていることがうかがえます。私立幼稚園の数値が全体的に低めなのは、園独自の方針を大切にしているためではないでしょうか。また、国公立幼稚園と公営幼保連携型認定こども園の数値がより高いのは、公営機関なので公立小学校との連携がしやすいことに加え、幼保連携型認定こども園は比較的新しい形態であるため、新しいことに取り組みやすい面もあるからだと考えられます。

保幼小の交流の際にポイントになるのは、園児が小学校生活のイメージをもてるようにすることです。ハンカチを持って生活するといった表面上の内容を伝えるだけではなく、どのような環境で、どのような学習をするのか、園児が具体的にイメージできるような交流が行われることを期待したいですね。

データ解説・本調査の担当
ベネッセ教育総合研究所 学び・生活研究室 主任研究員
持田聖子 もちだ・せいこ
妊娠・出産期から乳幼児をもつ家族を対象とした調査・研究を担当。主な調査は、「妊娠出産子育て基本調査」（2006年～2011年）、「産前産後の生活とサポートについて調査」（2015年）「幼児期の家庭教育国際調査」（2016～2018年）など。2018年より「幼児教育・保育についての基本調査」に携わっている。

3 「要録」の写しの小学校への送付状況

要録の内容について小学校側に補足説明している園が多い



小学校に「幼稚園幼児指導要録」「保育所児童保育要録」「幼保連携型認定こども園園児指導要録」（以下、要録）の写しを送付する際に、内容について小学校側に補足説明をしている園が７～９割近くと、高い比率であることがわかりました（3）。全体的に国公立や公営の方が比率が高いのは、公立が多い小学校との連携を取りやすいことが関係していると思われます。

本調査では、要録に関する課題や運用にあたって配慮していることなどを記入する自由回答欄を設けましたが、その内容を見ると、「地域に情報交換の制度があり、複雑な家族関係であることなどは直接会って伝えている」「要録記入後に小学校の先生に、園児の様子や家庭状況を話す機会を設けている」といった声が上がっていました（その他の自由回答は P.20～21 参照）。

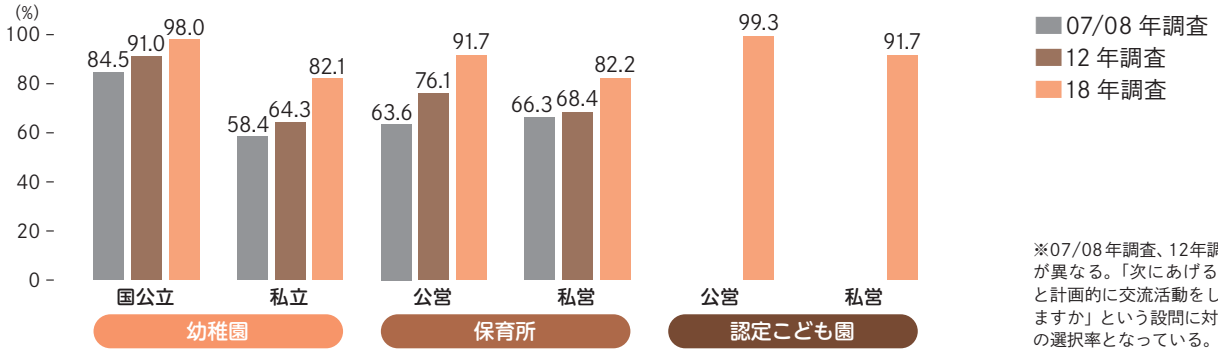
要録の送付で子ども一人ひとりの姿や発達の状況を知らせることに加え、多くの園で、要録に書き込みづらい家庭状況などの補足情報を小学校と共有していることがわかりました。

塩谷先生から

園の先生方から「要録を丁寧に書いても、小学校の先生に読んでもらえないのではないか」という声を聞くことがあります。確かにどのように活用されているのかは、学校や先生によってさまざまだと思います。ただ要録は、園や保育者にとって、保育を振り返るためのよい資料となります。例えば、要録には就学直前の子どもの姿が書かれています。担任保育者が書くことにはなりますが、園全体で内容を共有し、園のめざす子ども像を改めて確認することで、保育の改善につなげることができます。また、要録を作成する際には小学校との接続を踏まえ、「10 の姿」を意識して記入してみてください。「10 の姿」は子どもの育ちの指標であり、小学校と共有していくべきものです。その子どものよさや伸びていってほしいところなどを、「10 の姿」を通して伝えていけるよう工夫していただきたいと思います。

4 小学校との交流活動の有無

地域の小学校との交流は園種を問わず8割以上で実施



※07/08年調査、12年調査では聞き方が異なる。「次にあげる園外の人たちと計画的に交流活動をしたことがありますか」という設問に対する「小学生」の選択率となっている。

5 小学校との交流活動の内容

国公立幼稚園や公営認定こども園は多様な交流を積極的に実施

	幼稚園		保育所		認定こども園	
	国公立 (594)	私立 (729)	公営 (770)	私営 (1,218)	公営 (147)	私営 (552)
園児が小学校の見学や授業参観をする	81.5	67.4	60.4	64.1	75.5	70.5
園児が小学生と一緒に活動をする	87.2	62.8	69.2	61.4	86.4	66.8
園児が運動会や発表会など、小学校の行事を見学する	52.0	21.9	35.6	38.8	51.7	37.7
園児が運動会や発表会など、小学校の行事に参加する	37.9	20.0	35.1	27.4	44.2	29.3
園児が小学校の給食の体験をする	47.8	10.2	13.0	12.6	26.5	10.5
園児が小学校の校長や教員の話を聞く	43.1	16.9	20.5	19.3	35.4	21.4
小学校の教員が園児に保育を行う	10.8	5.1	15.5	10.0	13.6	7.4
小学生が園の行事を見学したり、参加したりする	41.6	26.1	29.7	33.8	43.5	34.4
その他	4.7	5.8	9.4	7.6	7.5	6.2

※複数回答。　※小学校との交流活動がある園のみの数値。(　　) 内は各園種の数。

地域の小学校との交流活動の有無を尋ねたところ（4）、18年調査では、全体的に8～9割以上と盛んに行われていることがわかります。

また、聞き方は異なりますが、07/08年調査、12年調査の同項目の結果と比較しても幼稚園・保育所ともに比率は高まっており、より交流活動が活発化していることがうかがえます。特に私立幼稚園では、07/08年調査の58.4%から18年調査の82.1%へと20ポイント以上、数値が高くなりました。

交流活動の内容を見てみると（5）、「園児が小学校の見学や授業参観をする」「園児が小学生と一緒に活動をする」が園種を問わず多いようです。また、園児が小学校に行くだけでなく、「小学生が園の行事を見学したり、参加したりする」という交流も実施されていることがわかりました。子ども同士の交流は、全体的に定着しつつあるといえそうです。

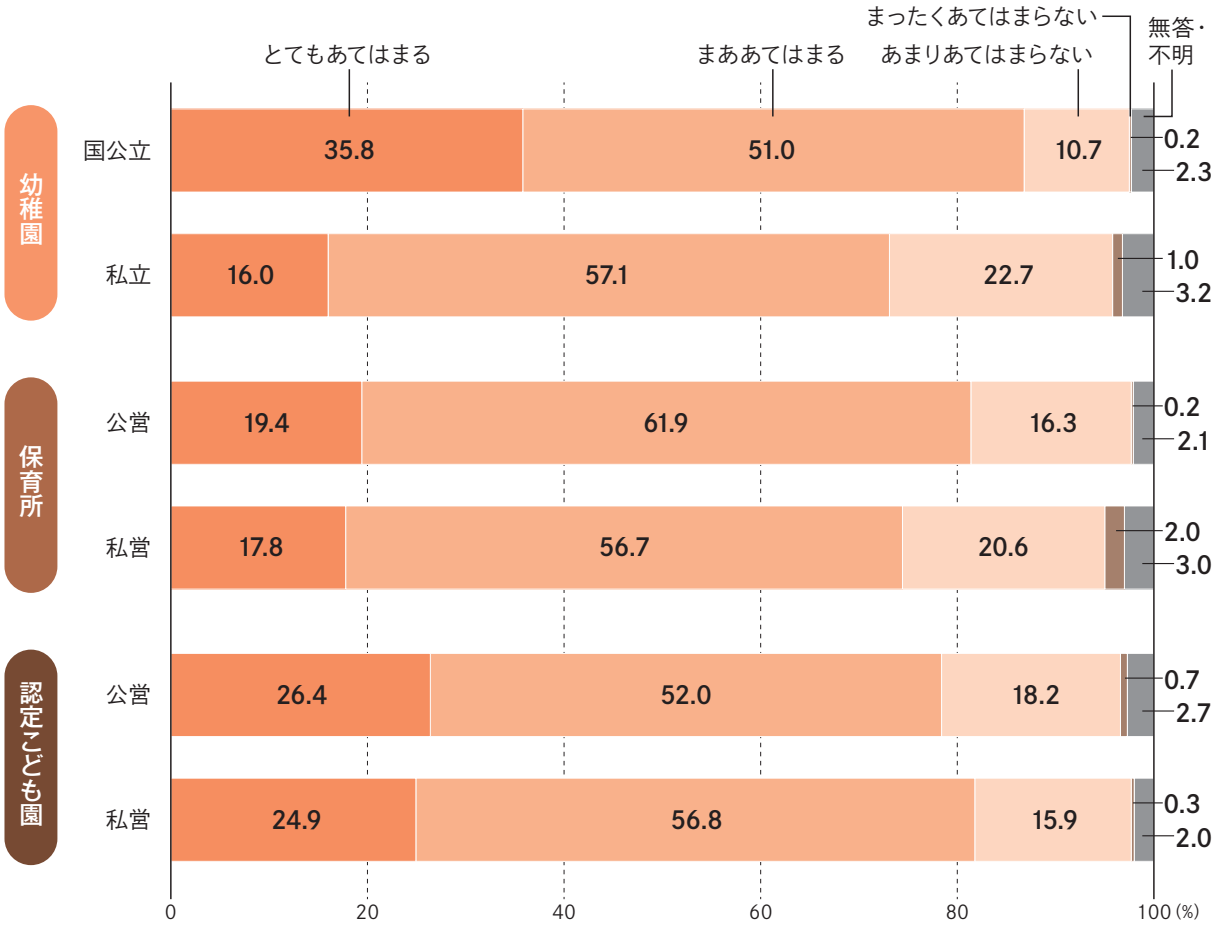
塩谷先生から

園児と小学生との交流で大切なのは、「互恵性」だと思います。互いにメリットがあるような交流にすることが、活動を充実させるポイントです。例えば、小学生が地域の乳幼児と触れ合う機会が減っているため、小学生にどのように園児と遊んだらよいかを計画させ、一緒に遊ぶという取り組みを実施している自治体もあります。小学校側の希望も聞き、交流活動を組み立てると、より意義の高いものになるのではないでしょうか。

また、今後期待したいのは保育者と小学校教員との連携です。幼児期に主体的な学びの土台を築くためには、どんな視点が必要なのかを考えるために、小学校の先生方との研究会などを開催している自治体もあります。互いが歩みより、スムーズな就学のために何ができるのか、より具体的なカリキュラムを設定することが今後の課題になると考えます。

6 小学校との連携を園の課題と感じているか

連携に関する課題を感じている園が多い



保育実践上、運営上の課題について尋ねたところ、園種を問わず7割以上の園が小学校との連携について課題を感じていることがわかりました（6）。特に国公立幼稚園は、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した数値が86.8%と他園より高い比率を示していました。

今回の調査から、新しい要領・指針を踏まえて、教育課程・全体的な計画の編成の見直しを図ったり、子ども同士の交流を行ったりする園が多いことがわかりましたが、課題を抱える園も多いことがわかりました。

本調査の自由回答欄を見てみると「アプローチカリキュラムを小学校に提出しただけになっている。小学校側のスタートカリキュラムとのすり合わせをする検討会をもちたいが、日程の調整が難しい」「小学校との距離を近づけたいと思っているが、小学校側にとっては対象園が多すぎるため、思うように進まない現実がある」などの声が上げられています（P.20～21）。これらの現実的な課題に対しては、互いの年間計画を立てる時期に合わせて日程を相談する、近隣の複数の園が横の連携を図って小学校にアプローチする、などの工夫が考えられます。

塩谷先生から

歴史ある私立の園では、長年にわたって独自のカリキュラムを実施しているため、小学校との連携が難しいと感じている場合も多いようです。しかし、独自のカリキュラムに重きを置いているとしても、幼児教育において最も大切な点は自発的な遊びを通した主体的な学びであることを理解していれば、めざすところは同じはずです。表現は違うかもしれませんが、新しい要領・指針と園のカリキュラムは、つながっているのです。

来年度から全面実施となる小学校の学習指導要領に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）は、これからの園と小学校が子どもの成長を共有できる手がかりとなります。それをもとに要録を書いたり、交流活動を活発化させたりして、園での子どもの育ちを小学校に伝えていきましょう。

保幼小接続への声をご紹介します FREE ANSWERS

保幼小接続について、園でどのような思いや課題をもっているのか、園の現場の声をご紹介します。

※寄せられた自由回答を、文意を損なわない範囲で編集し、掲載しています。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)について

●「10の姿」によって、幼児教育がどのようなものなのかがわかりやすくなったことはよかったと思いますが、小学校の先生が「10の姿」を「できている、できていない」と捉えてしまったら、それは意味が違ってしまいます。**小学校の先生に「10の姿」の意味を理解してもらえるようにしていくこと**が必要だと考えています。

●幼稚園では、「遊び」を通しての教育が方向目標を掲げて行われています。一方、小学校では、教科等の学習が到達目標を掲げて行われています。保幼小の接続の重要性が強調される中、**両者をいかにして接続していくか**を模索しているのが現状です。

●「10の姿」は、小学校との連携の際に、共通理解を図るための観点として有用ですが、半面、**達成目標ではないことをしっかりと伝える**ように常に肝に銘じています。

●「10の姿」については、それに向かった保育をするためのものではなく、**育ちを分析する際の目安である**と捉え、今まで大切にしてきた保育でよいということを確認しながら、振り返りを行っています。小学校との連携を図る際にも、「10の姿」について説明していきたいと考えています。

●小学校の先生に、園の目標や「10の姿」について説明を求められたとき、**保育者が説明できること**が、園と小学校の接続で大切になると思います。

●**園のめざす子ども像に取り組めば、「10の姿」は自然についてくる**と考えています。園の遊びがどのように小学校の教科や学びにつながるのかが、わかるようになるとよいと思います。

「要録」について

●クラス編成の時期に小学校の先生が訪ねてきますが、要録を見ているとは思えない質問もあります。園では苦労して要録を書いているのですから、**校長先生から確実に担任の先生に回すようにしていただきたい**です。

●要録は、園にとっては作成に手間がかかる割に、小学校の現場では生かされていないと感じています。そのため、本園では内容簡略化を検討し、要領・指針の改訂に伴って、手書きではなくシステムの使用も考えています。また、**保護者から個人情報開示を求められたときのことを考えると、要録にはなかなか本音で書けないもどかしさ**も感じてしまいます。

●要録作成の際には、5領域を窓口にして、子ども一人ひとりの個性と発達を見極め、**その子に応じた援助や環境づくりをどのように進めてきたか、丁寧に記載**することを心

がけています。

●要録を作成する際には、「10 の姿」に照らし合わせて、**結果だけではなく過程のエピソードなども交えながら**、保育者一人ひとりの視点を大切にして記載しています。

●要録を作成する際に「10 の姿」をどう入れ込んでいくか、各担任に今までの学びを生かして書いてもらいたいと思いますし、さらに**園長・副園長が助言する**ことで、小学校の先生に子どもの育ちが伝わりやすいものにしたいです。

「アプローチカリキュラム」について

●要領を踏まえて、教育課程の見直しを図ったり、アプローチカリキュラムを作成したりしていますが、まだ、アプローチカリキュラムを小学校に提出しただけの状態です。**小学校側のスタートカリキュラムとのすり合わせ等の検討会をもちたい**とは思っているのですが、なかなか日程の調整がとれずにいるところです。

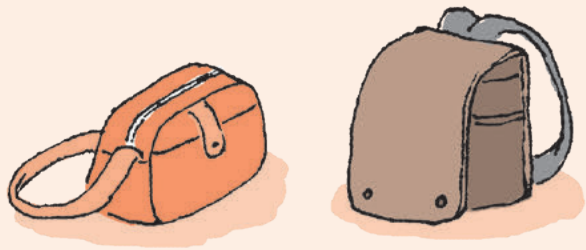
●年長クラスの担任になると、**保護者から文字や計算、楽器などについて小学校入学に向けた指導を求められる**こともあります。要領の趣旨に沿った保育実践がぶれないように気をつけなければと思います。

●本県では、保幼小接続カリキュラムとして、アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムの作成ポイントが示されています。それに基づいて自園のものをつくろうとしたところ、保育の構成・要素の違いなどから、かえって混乱する状態となりました。そこで、自園で培ってきた保育を軸に、カリキュラムの再構成を試みています。**若い保育者も交えた園全体で取り組むことで、保育のねらいと活動の関係性を深く考える作業**になっています。

「小学校との連携」について

●小学校との接続カリキュラムについて作成・研修を進めています。ただ、園と小学校が一堂に会した研修の実施は難しいので、**園で話し合った内容を教育委員会を通して小学校や他の園と共有**し、市全体で作成を進めています。

●園側は小学校との距離を近づけたいと思っていますが、小学校側にとっては幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園などと**対象園が多すぎるため、接続が思うように進まない**現実があります。



●幼稚園での活動の中で小学生が参加できるものがあれば、小学校に声をかけています。**園児と小学生の触れ合いが連携のきっかけとなるように配慮**しています。

●自治体には、小学校との情報交換制度があり、家庭の状況など**要録に記載できないような内容は直接会って伝える**ようにしています。

●小学校と園との子どもの発達に関する捉え方のギャップを埋めるために、要録記入後、**小学校の先生に、園児の様子や家庭状況などを直接伝える**機会をつくるようにしています。

●要録も大切ですが、小学校の先生と直接話をし、**保育の様子を見学してもらった方が、園での教育に対する理解を深め、小学校への移行がスムーズになっている**と思います。

●「10 の姿」を軸として、**小学校と共有できるような研修**に取り組んでいます。

表紙／裏表紙

千葉市・公立　宮野木保育所

◎2018年度、千葉市の保幼小連携・接続のモデル実施園の指定を受けた宮野木保育所。取り組みを通した学びを保育者間で共有して月案の見直しに生かしたり、写真やエピソードを盛り込んだ壁新聞を作成して保護者に伝えたりするなど、包括的な保育の質向上に結びつけています。

刊行に寄せて　ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは

すべての記事を無料でダウンロードできます

◎過去3回の特集テーマ

2019年 春号　次の保育につながる「記録」とは？

2018年 秋号　語り合いを通して深める幼児理解

2018年 春号　『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

※画像はイメージです。

https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

◎お問い合わせ先／「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口　〒700-8686 岡山市北区南方 3-7-17
0120-926-610（通話料無料）　受付時間：9:00 ～ 18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301 へおかけください（ただし通話料がかかります）。

9PL056-01

2019年10月21日発行　編集発行人 岡田晴奈　発行所 (株)ベネッセコーポレーション

©Benesse Corporation 2019